

オスカー・ワイルドの観たキリスト像

—— 獄中記から ——

小 泉 公 史

「ぼくは、十九世紀末の文芸と文化に対して象徴的な関係に立つ人間であつた。」また「神はほとんどあらゆるものをぼくに恵み給うた。ぼくには天才、優れた家名、社会的な地位、輝やかしい才能、毅然たる知性があつた。ぼくは芸術を一つの哲学とし、哲学を一つの芸術たらしめた。」このように公言してはばからぬワイルドが、果てしなく愚かしい官能の安逸のなかにみずから誘ひ込まれるままになり、怠け者、伊達者、流行児であることに余りにも耽溺し、卑小な性格、低俗な精神の持ち主たちに囲まれ、天才を浪費し、永遠の青春を濫費し、新奇な喜びや快楽を追求し過ぎてどん底に落ち込んでしまったのは、彼の意志というよりむしろ宿命的なものであつたように思える。

文芸上ワイルドが果たした役割は、第一に戯曲、小説、散文詩、押韻詩、巧緻で幻想的な対話、と広範囲にわたつて新しい美の様式を作り出したこと。(芸術は、人生から遊離し人生を超脱した至高の実在であり、人生こそ

芸術を模倣するとワイルドは考える。第二に世紀末の精神的に枯渇しかかった世相に、新しい想像力と呼び醒まし、神話と伝統を創造したこと。第三に感覚の世界に大いなる価値大系を要約していったこと等があげられる。しかしながら、ワイルドは文芸上の輝やかしい成功の蔭で、実生活では不用意にも若いダグラス卿との性的倒錯関係という醜聞に破れ去っていった。筆者はここで、ワイルドとダグラス卿の父クインスベリ侯爵との間で起った裁判の訴因や過程、ならびに二年間にわたるワイルドの獄中生活の苦痛や悲惨さについて詳述するつもりはない。この小論では『獄中記』の由来を簡略に述べ、ワイルドの新生活の根本理念となった「ワイルドの観たキリスト像」を考察するのが目的である。

『獄中記』は、ワイルドが一八九五年から二年間にわたって服役中、レディング獄舎で特に許されて出獄六ヶ月前から囚人用の青い用箋に、日を重ねて少しずつ書き綴った書簡体の手記である。宛名は彼の下獄の要因となつたアルフレッド・ダグラス卿となっており、出獄する当日彼を迎えに監獄の門にやってきた親友ロバート・ロスにあたえられたものを、ワイルドの死後ロスの手によって整理され、一九〇五年二月メッシュエン社から『デイ・プロファンデイス』の名で出版されたものである。ロスが載せた序文によると、この手記の公開は、ワイルドの獄中における苦悩と反省を世に知らしめ、文学者としてのワイルドの名譽を恢復し再確認させ、あわせて彼が遺した多額の負債を支払い、遺児の養育費を得ることを目的として刊行の決意を固めたということである。

しかしながら、発行当初は手記全体の約半分の量が公開されたにすぎず、他の半分は一九六〇年まで大英博物館に委託保存され、閲読禁止の処置がとられてしまった。その理由は、その部分にダグラス卿、その父クインスベリ侯爵、ならびにその母親に対する怨恨や痛罵の言葉が余りにも多く、発刊に当り、ロスがダグラス一家への

迷惑を配慮した結果であるという。ところが一九一二年になってアーサー・ランソムの『ワイルド研究』に端を発した訴訟事件が起り、はからずも手記の全貌が明るみになることになったのである。閲読禁止になっていた部分で、ワイルドは若いダグラス卿との友情を、憎しみや蔑すみや恨みで代えねばならなかったことを悲しみ、追憶の趣くま甘美な友情が不幸に終わった原因を厳しく反省している。

すなわち、いかにダグラス卿がワイルドの真の愛情に対して冷酷無情で身勝手であったか、卿が父クインスベリ侯爵の性格上の欠点をそのまま承け継いでいて、虚栄心が強く、物欲の烈しさをもってワイルドの憐憫と親切に甘えていかに彼を困らせたか、また、卿がいかに芸術に無理解で金銭的浪費家であったか等をワイルドは涙して訴え、しかもダグラス卿との関係を、幾度もそうしようと決意しながらその機会に恵まれず、どうしても精算しきれなかったことを歎き悲しんでいる。別れともなれば当然訪れるであろう現実的な醜い不愉快な状況や、悲しむであろう無能な卿の母親の歎きを思うとき、ワイルドの芸術家としての気質と誇りがそれを許さなかったものと考えられる。ワイルド自身はこのことを「小さな性格の大いなる性格への勝利」と呼んでいる。

このようにワイルドは一貫してダグラスの家族を責め、そのひとりひとりに反省を求めているが、他方自分の破滅を導いたものは結局自分の態度であったことを認め、残された人生において憎しみを再び愛に変えていかねばならないと、決意のほどを語っている。

さて、生れながらの道徳律廃棄論者であり、理性が作りだした法律によって不当にも有罪を宣告されたと信ずるワイルドは、入獄当初、木のベッド、粗末な食事と衣服、寒さ、苦役、厳しい統制、沈黙、孤独、羞恥のなかで憤怒し、荒れ狂い、死を乞い願ったものであったが、やがて倦怠と絶望の月日を経て徐々に心の平静をとり戻していった。しかし、憂鬱と悲しみにつつまれた彼にとっては、宗教も理性も道徳も無縁のものであり、悲しみの

うちにみずからの運命を受け容れるだけが精一杯の慰めであつた。このとき彼の心の奥底で突如として囁く声があつた。「この世には、人間にとって無意味なものはない一つ存在しない」と。ワイルドはこの声に謙虚に耳を傾けることができた。そして、苦痛も悲しみも自分にとって無意味なものではないのだ。快楽が仮面をつけて人を魅了するのと同様に、苦痛も悲しみも人の心にとって欠くことのできない最高の感情で、より純粹で美しい存在なのだと悟ったとき、彼は自分に残されていた唯一のこの「謙虚」という心境に心から感謝する気持になり、これからの思索の拠りどころにしていこうと決心する。ワイルドの説明に従えば、「謙虚」とはあらゆる既成の固定観念を捨て去り、一切の経験があるがままに素直に受け容れて心の糧にすることであり、かりそめにも憎しみや怒りに身をまかせて自分の魂を見失うことがあつてはならぬという心境のことである。ワイルドは謙虚になつて初めて、美しい肉体のために快楽がありとせば、美しい魂のために苦痛や悲哀や愛があることが理解できたのである。彼は謙虚になろうという気持を「今度獄舎を出るとき、なお世間に反抗したいという苦々しい心をもっているほどなら、むしろ家々を廻り歩き、他人の憫れみを受ける乞食になる方がよい」と言い切っている。こうして謙虚な心境で悲惨な獄中生活を素直に受容するようになったとき、「悲哀」の意味を真に感得できるようになり、「悲哀」をわがものにした結果、人生のすべてを会得することができるようになったとワイルドは信じたのである。ワイルドにとって「悲哀」こそ人生の真実であり、人間最高の情緒となつた。なぜなら人生の思慮分別、あらゆる思想のなかには必ず「悲哀」が微妙に躍動しているからである。刹那の美的快楽のみを貪る生活の枠を越えて、汚名、貧困、絶望、涙、苦悩を体験し、「悲哀」という一種の天啓の恩寵を蒙つた今、これからも美的生活を享受しつつ、「幸福な王子」、「若い王様」、「ドリアン・グレイ」、「芸術家としての批評家」において既に象徴されていたものを、みずから象徴的人間として卒直に実践していくことが、自己発展につながる

新生活への道であるとワイルドは確信するのである。彼が心の抛り処として選んだ謙虚の心境と「悲哀」、これこそ『獄中記』の第一のテーマであり、それはまた、彼の生活の靈的體驗の變形に外ならなかった。ワイルドが新生活への道を志向しはじめたちょうどその頃偶然にも獄中においてギリシャ語の聖書の入手が許されることになった。元来ワイルドはクリスチャンの家系に生まれていたとはいえ、信仰に専念したわけではなかった。

しかるに、彼が息子のために書きくだした童話集のなかにも、また『ドリアン・グレイの画像』の中にも、素材としての人物描写に多分に宗教的雰囲気が漂っていて、それが作品の一つの特徴ともなっている。しかしながら、それはキリスト教の教義に則したというよりむしろ美的憧憬の世界に近いものであり、ワイルド自身が深くキリストの生き方に共鳴したわけではなかったのである。彼は獄舎の孤独な生活のなかで聖書をじっくり読み親しむにつれて、この世で「悲哀」を最もよく體現したものがありとすれば、それはキリストのみであると考えようになった。そして次第にキリストの生涯が彼自身の獄中體驗を通して昇華され、同情となり、愛となって出獄後の心構えとなっていく。とはいっても勿論、ワイルドがキリスト教の眞の精神を宗教的に着実に継承したとも言えないし、事実出獄後にキリスト教徒にふさわしい信仰の生涯を終えたわけでもない。死に至るまで芸術的生活に徹した彼にとって、キリストはあくまで彼自身が美的觀念にそって捉えたキリスト像であり、従ってワイルドの血となり肉となるためには、芸術觀との妥協の産物とならざるをえなかったといえる。この唯美主義者ワイルドの観たキリスト論が、『獄中記』の第二のテーマである。

ワイルドは、「キリストの眞の生活と芸術家の眞の生活の間には密接な聯関がある」と主張する。以下その聯関を『獄中記』の内容から逐次辿ってみることにする。

第一に、キリストの資質の根底は芸術家の資質のそれと同一である。キリストは強力な焰のような想像力をもっており、人間関係の全領域にわたって想像的共感を実現したが、その想像的共感はまだ芸術家の創作の唯一の秘密でもある。キリストは想像力を働かせて癡者の癡を、盲人の闇を、快楽に生きる者の怖しい惨めさを、富める者の異様な貪しさを理解したのである。他人の身の上に起ることは自分の身にも起りうることでないか。キリストは癡者でも、盲人でも、快楽主義者でもなかった。しかるに彼は想像力によって人間の存在を実感し、神の心と意志を把握し、人間と神を自分のなかで結びつけた形で、詩人のような資質を体現した人物である。

これまでは、英雄にしてもみな一民族のみを対象としてきたが、キリストは諸民族に分かれていた人類を一体として、その全体の解放を志したのである。ガラリヤのこの若い田舎者が、全世界の重荷をおのが双肩に担いようと夢みるとき、かみは皇帝からしもは強盗、囚人、浮浪者、虐げられた人々に至るまで、人間世界の不遇に涙した人々の苦悩のすべてを、みずからの心に写しとることができたということは何という驚異であろう。彼の人格に触れる者はみな血湧き肉踊るあのロマンチックな感激と同種のものを覚え、おのずから罪の醜くさが浄化され、悲しみの美しくさに打たれずにはおれなくなる。

第二に、キリストの全生涯はすばらしく崇高な詩であり、生活そのものが美しく荘大な芸術でもある。キリストが恐怖を克服し、憐憫と愛に終始した絶対的純潔性、殊に受難の最後の晩餐からその後の処刑にいたるまでに演ぜられる悲劇性は、人の魂を魅了するに足る文芸作品そのものである。ワイルドの言葉にしばらく耳を貸そう。――「弟子たちとともにしたささやかな晩餐。その一人は既に金でキリストを売っているのだ。静かな月光の庭に満ちる苦悩。接吻でキリストを敵に知らせようとする偽りの友。なおもキリストを信じ、彼を厳とみなしてその上に人間の避難所である教会を築きたいと念じていたにもかかわらず、鶏が暁を告げたとき、われ彼の

ひとを知らずと答えてキリストを拒んだ友。キリスト自身の無上の孤独感、忍従、すべてを受納する心。その他さまざまな場面がある。激怒してキリストの衣を引き裂く正教派の大祭司。みずからを歴史上の大悪としたかの罪なき人の血のしみを、わが身から洗い去ろうと空しく願って水を求める大守。有史以来最も驚くべきものの一つとなったあの悲しみの載冠式。その母とその愛する弟子の面前での「罪なき人」の磔刑。その衣を賭けて賽を振る兵士たち。死の最も永遠なる象徴として彼が世界に示した恐しき死。あたかも王の子であるかのようにその屍は高貴な香料とともにエジプトの亜麻布に包まれ富者の墓に横たえられた最後の埋葬。これらすべてのことをただ芸術的見地からのみ眺めるとき、教会の最も重要な職務がこの悲劇を流血の惨事なしに演じてみせること、つまり対話と衣裳と身ぶりによる主の受難の神秘的な表現であることに感謝しないではいられない。」――

キリストの生涯は、羊の群れ集う緑の牧場で清冽な流れを求めてさまよう羊飼に似て精妙で、その奇蹟は、春の訪れに似てこよなく自然に思われる。彼に接する者はその気高い人格に惹かれ、悩める魂には平和を、苦痛にあえぐ者には恍惚を、快楽に耽ける者には人生の神秘と愛があたえられた。これらはみな悲哀と美の極地のなせる業であり、実に一つの詩的牧歌の世界といえる。

第三に、ワイルドによればキリストは稀にみる個人主義者である。キリストが不斷に追求するものは靈魂である。彼は人間の魂を「神の国」と呼び、その小さき種をすべての人の心のなかに見出し出している。そして、人はあらゆる情念、教養、財産を完全に捨て去ってはじめてみずからの魂の存在を実感できるようになると説く。ワイルドにしても囚人となり、破産し、愛する二児までも法律によって奪い去られ、絶望のどん底に沈んでみてもじめて自分の強情と反抗心から解放され、なすべきことは自分を取りまくすべてを受け入れることだと気付いたのである。他人の思想に染まり、自分の意見をもたず、物まねの生活を送る者は、自分の純なる魂を忘れた人間

に外ならない。このような意味で、キリストが罪人、卑賤の者、悩める者だけでなく、富者や享樂主義者や権力者にもいっその憐みを寄せ、そのすべてを受け容れようとしたのは真に目覺めた個人主義の意志のなせる業であり、断じて他律的な博愛主義に拠るものではない。従つて、他人のために生きることがキリストの信条では絶対になく、「汝の敵を愛せよ」とは、愛は人にとって憎しみよりはるかに美くしいからにはかならない。「汝のもてる物をことごとく売り、貧しき者に施せ」とキリストが言うとき、富に傷つけられた若者の魂を救うための言葉であり、貧しき者たちに同情した結果ではない。この態度は、自己完成という必然の法則によつて自然や事物に對面し、詩人は歌い、彫刻家は思索し、画家は情感を写し出すあの芸術家たちの態度と同様である。キリストが他人の命と自分自身の命の間には、何の相違もないことを人々に説き、各自がそれぞれに拡張された普遍的個性を附与すべく努めるべきであると主張したキリストの立場を、ワイルドは、文化が人間の個性をより強烈なものにし、芸術が人を千万人の心をもつ人間に育てるのにあてはまると言っている。

第四に、キリストは、われとわが身をもつて觀念の外的表現としてゐる。芸術的な氣質の共鳴は、必ず表現されたものによつて呼び起されるものである。芸術家は表現することのみずからの人生を認識する。芸術作品とは芸術家の觀念から形象への轉換を意味する。

キリストにおいても、驚くべき想像力を駆使して、言葉に出す術をもたぬ悲しめる人々のために、わが身わが聲をもつて具現化し、野の百白の美とぶどう酒の神秘を語り、苦悩と悲哀に埋れながら奇異なまでに運命づけられた生涯の幕を閉じたのである。「キリストにおけるごとく、人みなそれぞれに予言の成就であるべきだ」とワイルドが言うとき、「ぼくは時代の文芸と文化に對して、象徴的關係に立つ人間であつた」と公言する彼の自負が肯定できる。されば芸術における眞実とは、外面が内面の表現となり、魂が肉体化され、肉体が形式がみずか

らを表わす精神に満ち溢れることにほかならない。

第五に、芸術の一大思潮であるローマン派の流れには、必ずといっていいほどに何かの形でキリストが、あるいはキリストの魂が存在する。ワイルドは、『ロミオとジュリエット』のなかに、『レ・ミゼラブル』、『悪の華』、プロバンスの詩、ロシアの小説のなかにキリストがいると言う。また、モリスの色硝子、ミケランジェロの大理石像、ゴシック式建築は、キリストに属するものであるとも言う。キリストのうちには生命を彩るあらゆる要素が、すなわち神秘が、奇異、哀感、暗示が、忘我の境地が、そして愛があるのだ。キリストは驚異の念に訴え、かつ状態を創造する。人々はこれらを通じて彼を理解し、みずからの世界を脳髓のなかに創り出していくのである。このように考えることによって、ワイルドはキリストのなかに人生におけるローマン運動の先駆者を発見し、キリストが幼児をもって年長者の魂の模範として掲げたことに賛同した。彼は、キリストが人生を変遷躍動してやまない相としてとらえ、物質的な、ありふれた関心事にかかりすぎてはならぬと諭し、実際的でないことを偉大であり、その日の業などにくよくよするべきではないと説いた態度に、芸術を志す者の姿を見た。「明日のことを思い煩うなかれ。生命は糧より優れ、身体は衣より優れるものならずや」と言うときのキリストは、全く魅惑的だと彼は想う。キリストの道徳は共感そのものである。道徳とはまさに「共感」そのものだといワイルドも逆説的に考える。また彼は、キリストの正義とはまさしく詩的正義であるとの判断をくだす。たとえ炎天のもとでまる一日勞せずとも、涼しいぶどう園で夕刻の一時間を働らいた者が、同じだけの報酬に値しないと誰が言えよう。人にはそれぞれ天与の資質がある。一樣にとり扱う機械的な機構こそキリストの堪えうるものではなかった。自分の資質を自覚し、魂の命ずるままに生きる人、その人のなかにキリストは正義を見たのである。キリストはまた、正義の名のもとに、彼が生きていた時代を風靡していた俗物主義とも戦った。(俗物とは、思想

もなく重苦しく、煩わしく盲目的で、機械的な社会の力を支持し助長する人間のことである。すなわち、俗物主義者とは、自己の世俗的成功と、人生のくだらぬ物質的我欲のみに執着し、だれか個人のうちに、あるいは何か運動のなかに躍動する優れた力に出会っても、それを頑固に認めようとしない人間を指す。すなわちキリストは、本来人間のために作られたはずの既成の諸制度ならびに価値体系が、逆に人間をその枠にはめ込んで身動ききならぬ俗物をつくりだしていることを憎んだのである。

このことは、産業革命がもたらした世紀末のイギリスの俗物たちがロンドンを闊歩する姿と好一对であり、冷えた博愛、公共慈善事業、物質万能の中産階級の思い上り、退屈きまる形式主義に対し、唯美主義の旗印のもとに断固として戦い、侮蔑をもって対抗したワイルドの正義感にそっくりといえる。正統主義にとらわれることは、安易な盲従にすぎない。キリストは、予定された義務の手順に捧げられるマンネリ化した生活に反対し、魂の命ずるまま刹那のために完全に生きることを読いた。いかなる瞬間も美しくあれ。

キリストの願いは、単に人々の苦悩を救い、悪人を改心させることではなかった。人は悔い改める過程のなかで自分の行為の自覚が生まれる。自分の魂の認識を得る瞬間こそ罪人は救われるのだ。過去のいまわしい行為はこの美しい聖い瞬間によって新しい生命を得ることができ、このことだけが人がみな成就しうる唯一のことだとキリストは言うのである。そしてこのキリストの願いは、そのまま美的生活を目指すワイルドの願いでもあった。

第六に、キリストの生活の目標は、神的なものにじかに触れることであり、神の秘奥にできるだけ近づくことであった。人生を、方法と手段の周到な計算ずくで、抜け目なく機械的に自分の目的通りに事を運ぼうとする人は、努力次第で目的地に行きつくことができるかもしれない。役人、議員、弁護士、商人と一応は成功する。

しかし、ダイナミックな力や情熱が横溢して、自己の実現のみを希う芸術的生活を望んでいる人は、自分の目的地を知らない。知りえないのだ。獄中であらうと、白日の下で生活しようと、人間の魂は量り知れないものであると認識することが知慧の終りである。愛の精神、それは各人の心に宿るキリストの精神であるが、苦悩を経たきた人間のみがもてる特権でもある。恐らく現代人の目には、社会的な不名誉、惨めな境遇、破滅、恥辱、これらの悲劇は陳腐で醜く、なんの風情もなく映ることであろう。彼らには、囚人は傷心の道化師にしか見えないかもしれない。それは囚人自身が作り出した仮面であるかもしれないが、囚人といえども自分という確固たる台座の上に立ち、深い悲哀を感じとった者の蔭には魂がある。自由にこの世の美しくさを眺め、この世の悲しみを頻ち理解できる人は、人として神の秘奥に限りなく近づいた人といえる。「最大の悪徳は浅薄である。すべて実成されたものは正しい」と考えるようになったワイルドの背後には、このような認識があったものと思われる。「出獄のあかつきには、忍従と寛容と謙虚な精神のなから、また新しい自己発展の道を進むことになるう。自分が陥ったあの怖るべき俗物的雰囲気を取り、あらゆる美しいもの、輝やかしいもの、すばらしいもの、大胆なものを求めて、キリストの世界を実現することに励むことになるであろう。なぜなら自分は、行為においては責任の、人生においては清教主義の、芸術においては道德のチャンピオンとして登場したのだから」と告白するワイルドの言葉は、彼がわが身に起った不幸を真摯に受けとめみずから悔い改めた結果、いっそう大きな情熱の統一と素直な衝動の調べをもって、現実生活を芸術と調和させていける自信がもてるようになったことを物語っている。

以上がワイルドのキリスト観である。彼はキリストを上記のように解釈し、その人格の魅力を憧憬し、みずか

らがキリストのような心境を体得しようと決意すると同時に、ダグラス卿にも反省を求め、「過去を恐れるな。自分同様キリストのごとくなれ」と要望している。アーサー・ラムソンは、「ワイルドは、その生涯のなかで『獄中記』を書いたときほど、彼の思想が莊重に活躍したときは珍らしい」と言っているが、実際に芸術、人生、自然にわたって、彼がこれほど巨視的な立場に立って、その瞑想をほしいままにしたことはなかったのではあるまいか。この手記を終えるに当り、ワイルドはブレイクの「曙が丘を越えて訪れてくるのをしか、人は見ないが、そこにわたくしは神の子たちが歓喜の叫びをあげているのを見るのだ」という句を引用しているが、この言葉は、彼がいかに新しい生活に希望を託していたかをよく表わしている。

『獄中記』は、要約すると「悲哀」の美とキリストの芸術家であることを主張している手記といえる。この書物は、出版と同時に多大の反響があり、当然ながら賛否両論が当時の雑誌の書評欄を賑わしたという。メエソンの編集になる『ワイルド書目史』によると、ワイルドにきわめて好意的な論評も若干みられる。略述すると、ワイルドは獄中生活において、従前の唯美主義を一切否定して、その非を悟り、快楽に耽溺して身をもち崩した過去の行為をすっかり悔い改めて、新しく宗教的な生活を志向するようになったのだから、心から喜んで彼の再生を認めてやるべきであるといったような論旨になるが、実は、ワイルドは終生唯美主義者であることを放棄したわけでもなく、また、自分の罪を正当な罪として納得せず、社会の浅薄がなせる業であると考えているわけだから、この論評は余りにも同情論すぎるきらいがある。反面ワイルドに露骨に悪意をいだいた論評もかなり見られる。それを略述すると次の三つに分類される。まずその一つは、ワイルドは服装も言行も生涯通して人工的で、一度もその変化は見られなかった。快楽に対する彼の態度も獄中獄後を通じていさかも変っていない。従って

改悛の情など彼にはありうべくもなく、たとえ『獄中記』のなかで、新しい「自己実現」などと言葉巧みに申したてていても、結局は「我欲拡張」のことであり、特に彼の神に対する態度は不尊きわまると批難する。またその二は、宗教家たちの反論で、彼らは口を揃えて憤慨し、ワイルドがキリストを芸術家として解釈するのは、甚だしき冒瀆であり、許すべからざる神への反逆であると批難しているが、これも宗教人としては当然すぎる反論である。しかし、芸術の何たるかを理解しようとしてもしい彼らの態度もまた、宗教という一種の偏見のなせる結果であって、必ずしも公平な見方とは言い切れないものがある。次にその三は、『獄中記』の表わす内容はふまじめで不誠実であるという批難である。確かにワイルドは謙虚になって悲哀に徹し、新生活への誓いをたてているが、快楽を否定しようとする態度は全く見られない。言葉でどんなに弁明しようと、それは口先きばかりで、真に自己の改革が内面に起っていたかどうかは疑問である。一例をあげると、ワイルドは獄中での体験を教訓として、ダグラス卿に、過去の苦悩や恨みを捨てて生まれ変わった生き方をせよと要望しているが、その言葉の裏にあるダグラスに対する執ような恨みの気持は完全に拭い去られてはいないかと攻撃する。確かに疑えば疑える点もいくつかある。しかし、少くともワイルドがキリストの生活に共鳴し、悲哀という理念に支えられて、新しい生活を目指そうと真剣になって自己転化の努力をしていたことには偽りはなさそうである。その意味では、やはりこの手記はまじめで誠実な書物といえそうである。

さて、このように考えてくると『獄中記』をめぐる好悪両者の論評は、いずれも正確に的を射ているように思えない。現実の結果はともあれ、やはり両者の中道に立って公平に判断せねばならぬと筆者は考える。先ず、ワイルドの側に立って考えると、この手記は、美的生活に対する悔悟ではなく、むしろ是認であり、美意識拡充

の書物となる。なるほどワイルドは、自分の罪惡について言及してはいる。しかし、それは社会の浅薄さと自身自身の浅薄さから由来するもので、刑罰に値する罪とは到底彼には思えないのである。彼が罪を認めるのは、そうすることによって生ずる苦痛や悲哀が、人間をより高い境地に到達させてくれる重大性をもっていることを知らせんがためである。また、ワイルドの悟入した「悲哀」の哲理は、まさに体験に基づいた美的生活の延長線の上に立った新しい理念である。

言葉を換えて言うと、ワイルドは入獄後といえども唯美主義の生活を一貫して変えず、美の解釈範囲を単に快樂のみにとどめず、悲哀にまで転化拡張していき、その理想的な姿をキリストの生涯に観たのである。入獄前のワイルドは、世の中のありとあらゆる美的なことがらと快樂を味わい盡くしたいと希う余り、事物の日の当る面だけを見ることに専念して、失敗、貧困、苦痛、絶望、悲哀、良心の仮借など、いわゆる日蔭の面を見ようとしなかったのだ。見るのが怖かったのである。しかし、投獄を機会に、彼は遂にその日蔭の秘密を見てしまったのだ。しかも、そのことによってキリスト像にみられるような人生哲理上の唯美主義が芽生えて、従来の美的生活を変える必要を全く感じないばかりか、ペイターの唱えた経験そのものを目的とした刹那の美的印象を、身をもって具現することになったのである。そして、「悲哀」をわがものにするこゝで、いっそう美的感覚の幅が拡がり、人生と芸術の美的関係により大きな伸展をもたらしたといえる。

さて、それでは次に、ワイルドの悔悟を悪くいう側に立つて考えてみることにする。最も大切なことは、『獄中記』がワイルドの眞の悔悟の情を表わしているに値いするだけの人生における深刻さを、感じさせるかどうかという点である。結論から言うと「否」と答えざるをえない。人生における深刻さは、人間生活の極限、つまり絶体絶命の窮地に立つて存在の選択を迫られるとき、真とか宗教とか道徳がその基調に混入してくるにつれて現わ

れてくる。魂が生命の實在に対して求心的な働きをすればするほど、深刻さは増大するものである。ところで、芸術とは、体験したすべてのものの純粹な美的意識を、ありのままに表現する様式であるから、苦痛も悲哀も美化に努めれば努めるほどますます外に向けて発散し、深刻さは薄れていく結果となる。これを逆説的に言えば、深刻さとは、美意識に対する實在の圧迫感ということになる。キリストの解釈にしても、美意識で理論付けようとすればするほど深刻さは減少し、それに加えて、ワイルドの文体が華美軽快であるだけに内容はいつそう皮相に思えてくることになる。そしてこのことが、反対論者に物足りなさ、反論をひき起こさせる一番大きな原因ではなからうか。ともあれ今一度繰り返して言う。『獄中記』の果した意義は、ワイルドが獄舎の苦痛にみちた体験を通して、芸術の唯美主義に人生の唯美主義を合一させ、美的生活に、より大きな伸展をもたらしたことにあると。この意味で、やはりワイルドは、唯美主義の秘奥を一身に具現した一代の使徒であり、近世文化の象徴的人物の筆頭にあげられる人物であるといえることができる。

ワイルドがベントンヴィールの監獄の門を出たのは一八九七年五月十九日であった。彼はその日のうちに海を渡り、フランスの北海岸にやってきた。彼に同情をよせる友人たちの盡力で与えられた金額は、当分の間彼に不自由させないはずであった。しかし経済観念のうすれた彼は、困窮の友のために惜し気もなく浪費して、たちまち金に窮することになった。その後の生活は、内面の明るさとはうらはらに、外面は悲惨そのものであったという。その上、二年間の獄舎生活ですっかり健康をそこね、再び文筆生活に戻りたいという希いも空しく、ナポリへの旅を終えた後、パリーにおいて一九〇〇年十一月零落のまま一生を閉じたのであった。おわりに、アンドレ

・ジイドがその間のワイルドの消息を、かなり詳しく書き残していることを附記しておく。

参考図書

- Ransome Arther : O. Wilde; A Critical Study 1921.
Karl Beckson : O. Wilde; The Critical Heritage 1970.
Rodney Shewan : O. Wilde; Art and Egotism 1977.
以下省略